【プレスリリース】「映画を好きになってみたい人こそ必読！」濱口竜介監督も絶賛！

書籍「元町映画館ものがたり　人・街と歩んだ10年、そして未来へ」

発売１週間で重版決定！

映画を愛する小児科医が呼びかけ、「観たい映画を上映したい！」という映画ファンが結集し、2010年に神戸・元町商店街で誕生した1スクリーンのミニシアター、「元町映画館」。10周年イヤーだった2020年、コロナ禍で映画館スタッフは何を思ったのか。これからの10年に向けてどんな映画館を目指そうとしているのか。開館からの10年ちょっとを振り返りながら、神戸という街と観客に育まれていった映画館の過去・現在・未来を見据えた同館初の書籍「元町映画館ものがたり　人、街と歩んだ10年、そして未来へ」（元町映画館出版プロジエクト刊　責任編集：江口由美　2970円税込）をこの8月21日に刊行し、発売から１週間で重版が決定しました。出版不況が長く叫ばれる中、自主出版では異例とも言える大反響を呼んでいます。映画館を愛する全ての人に贈る、映画ファンが作ったミニシアター奮闘記、ぜひ貴媒体でのご紹介をご検討ください。

▪コロナ禍で臨時休館から再開までの全４ヶ月の記録を全公開

映画館全面協力のもと、スタッフや、映画関係者に取材を敢行し、設立構想から2021年8月の初製作作品配給と現在進行形のプロジェクトまで、多岐にわたって元町映画館の動きを解き明かしています。コロナ禍については、臨時休館してから再開までの全４ヶ月の記録を現場の動きを中心に詳細に記載。再開後の2020年8月15日に森田恵子監督（『小さな町の小さな映画館』『旅する映写機』『まわる映写機　めぐる人生』）を招いて開催した10周年記念トーク「これからの映画館のあり方を考える」も採録。2021年4月に急逝された森田監督のラストメッセージとも言える貴重な言葉や写真を収録、映画館やスタッフに向けたあたたかい眼差しを感じていただけることでしょう。

▪濱口竜介監督、池谷薫監督と林未来支配人による特別対談を収録

またスペシャルコンテンツとして、濱口竜介監督（『ハッピーアワー』『ドライブ・マイ・カー』『偶然と想像』）、元町プロダクション主宰の池谷薫監督（『蟻の兵隊』『ルンタ』）と林未来支配人による特別対談を収録。濱口監督との対談では、昨年大成功に終わったミニシアター・エイド基金や『ハッピーアワー』公開につながる同館との出会いのエピソードに加え、ミニシアターと映画制作者が目指すべき未来として『偶然と想像』に結実したこれからの映画制作のあり方についても語っています。また池谷監督は、映画監督が根城の映画館を持つ意義として元町プロダクションの活動や、最新プロデュース作『僕とオトウト』ができるまでのプロセスを披露。長年積み重ねた信頼関係があるからこそ語り合える深い内容になっています。

▪スタッフのライフヒストリーと「映画館の1日」

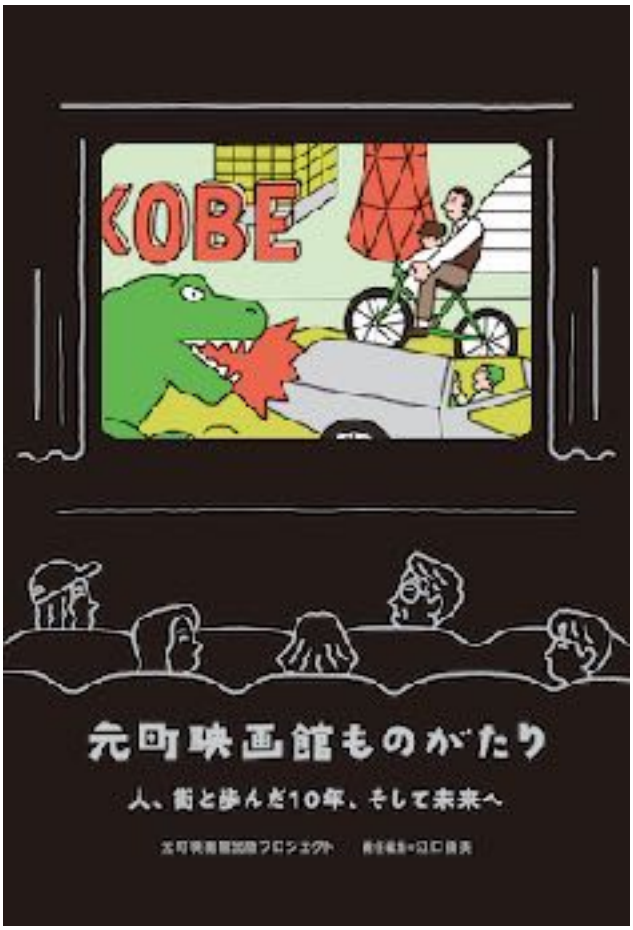
映画館スタッフが元町映画館で働くにいたるまでのライフヒストリーをノンフィクション風に綴っています。今の映画館での仕事を紹介するだけでなく、その仕事のどこに魅力を感じるのか、取り組む上でのポリシーにも肉薄。その葛藤も浮き彫りにしています。一方、ミニシアター初心者にもオススメのコンテンツが「映画館の1日」。映画館の仕事をオープンからクローズまで密着し、その日の上映作品やお客様の様子、スタッフやボランティアスタッフの仕事ぶりをつぶさに綴りました。元町映画館のアナログぶりをはじめ、まるで実際に行った

ような気分になれること間違いなし！

▪「映画の好きになり方が詰まっている」、濱口監督絶賛の映画チア部座談会
　刊行記念トークで濱口監督が明かしたのが、映画チア部座談会の魅力。「学生時代、映画を好きな人に憧れたけれど、どうやったらそんなに好きになれるのかがわからなかった。この本を読んでいると『こういう風に映画を好きになるのか』というところが、とても具体的に書かれている。映画チア部の座談会とか、すごくいいですね」

▪東京オリンピック開催やサイレントデモまで！映画館と神戸／映画界／世の中の動きをまとめた一級資料
　巻末資料として、元町映画館年間売上　上位10作品一覧と年表（元町映画館と神戸、映画界、世の中の出来事）を掲載。特に年表ではコロナ禍での世の中の動き、映画界の動きをできるだけ取り入れ激動の時代と映画界の新しい動きを詳細に記録しました。2021年5月に東京と大阪で行われたサイレントデモから、東京オリンピック、パラリンピックの開催まで、2010年代からコロナ初期を将来振り返る時に役立つ一級資料になっています。

▪思わず手に取りたくなる！人気イラストレーター、朝野ペコさんによるイラスト



　スクリーンに見立てた窓がついたデザインが「遊び心に溢れている！」と大人気。『花束みたいな恋をした』劇中イラストで今や大人気イラストレーターの朝野ペコさんは開館以来元町映画館のチラシイラストを手がけてきたボランティアスタッフでもあります。ブックデザインの駒井和彬さん（こまゐ図考室）と、商業出版では不可能な、自主出版ならではの手に取りたくなる装丁を実現。
　カバーを取ると、映画館愛溢れるイラストが展開されているのもお楽しみポイント。名作映画へのオマージュ、いくつ見つけられるかぜひお試しを！

【コメント、続々到着しています！】
映画は人なり。映画館も人なり。ミニシアター衰退期に誕生した元町映画館。
その中にいる人たちの奮闘とわちゃわちゃと志を知ったら、今まで通り過ぎていたあなたも映画館という新たな世界への扉を開けてみたくなるはず。「映画を好きになってみたい」人こそ必読！
濱口竜介監督（『ハッピーアワー』『ドライブ・マイ・カー』）

街の映画館の奮闘が生き生きと描かれていて、すばらしい。
元町映画館の観客が僕のドキュメンタリー塾に集まり、やがて映像制作集団「元町プロダクション」が誕生した。この本は全国のミニシアターに力を与えるのではないか。
池谷薫監督（『蟻の兵隊』『ルンタ』／元町プロダクション主宰）

映画館の個性や魅力を息づかせるのは様々な形で関わる人々の力であるということが鮮やかに伝わって来ま

す。朝野ペコさんのイラストに掛けて『花束みたいな映画館だった』でしょうか。20周年を迎える時にはどんな人々が更に関われているかを楽しみにしています。
松村厚さん（映画宣伝 & 次世代映画ショーケース実行委員会委員長）

これまでの軌跡とこれからも続く模索を克明に刻んだ一冊。だが、すぐれた「ものがたり」ほど何かを欠き、何かを待つ。本書は、読む者が商店街に佇む映画館の体験と記憶をページに投影することで真の完成を遂げるだろう。表紙にあしらわれたスクリーンが示すのは、そのための余白だ。
吉野大地さん（ラジオディレクター）

なぜ元町映画館に憧れるのか、元町映画館を愛して止まない理由が詰まった必読書！
山崎紀子さん（シネ・ヌーヴォ支配人）

元町映画館の開館は私が映画館で勤め始めたのと同じ年。自分のことも振り返りながら知れて良かったことがたくさんありました。
吉田由利香さん（京都みなみ会館館長）

こんな「遊び心」に満ちあふれた本を手にするのは久しぶり。ウキウキしてページを繰ると、なんとも熱い、熱い〈映画愛〉に圧倒されました。映画が好きで好きでしゃーない人たちの想い（愛）が凝縮されていました。だから、ビンビン心に響いてくるんですね。ホンマに素敵な映画本ですよ〜‼
武部好伸さん（エッセイスト）

本当に労作。元町映画館が人と人、人と映画、人と街をつなぐ場所だとよくわかりました。心が豊かになった気がします。
大田季子さん（「朝日ファミリー」元編集長）

この本は人の香りがある。人間であることを肯定したくなる。
人に出会うことは自分に出会うことで、まるで自分の中を旅しているようでした。
高濱浩子さん（画家）

【元町映画館出版プロジェクトからのコメント】
期せずして重なった10周年とコロナ禍。映画館で映画を観る事が「不要不急」とされ、動画配信サービスが隆盛を極めるなか、ミニシアターの存在意義について否が応でも考えさせられた年でした。しかし、思えばこの10年間ずっと、私たちはその問いに対する答えを模索し続けてきたわけで、この本はその記録であり、証でもあります。
2020年春の休館時には、びっくりするほど多くのご寄付をたくさんの方々からいただき、大変勇気づけられました。10年経っても決して盤石な組織とは言えませんが、支えてくださる方々に、この本を通じて少しでも私たちの歩みを知っていただき、そして未来を一緒に歩んでいければと思います。
（元町映画館理事　住田明世）

元町映画館のことを知りたい方はもちろん、映画館の1日や、その仕事がわかるミニシアター入門本であり、神戸という街の文化を映し出した本でもある。そして何よりも日々現場で奮闘しているスタッフたちの人生や想いをできるだけ克明に記したノンフィクション本です。
10年後にどんな映画館になっていきたいかを読者のみなさんにもぜひ一緒に考えていただきたい。良ければ仲間に加わっていただきたい。そんな想いを込めました。この書籍をきっかけに、みなさんにとって映画館とはどんな存在なのかを思い描いていただければと思います。
（元町映画館社員／ライター　江口由美）

【元町映画館とは】
硬派なドキュメンタリー映画から新進作家のインディペンデント映画、往年の名作など多種多様な作品を上映。観客とスタッフとの距離感が近い映画館、日本で一番イベントが多い映画館と呼ばれる神戸のミニシア

ター。池谷薫ドキュメンタリー塾オンラインなどコロナ時代の新たな試みを勢力的に行なっている。同館から誕生、今や京阪神に広がった学生の映画応援団体、映画チア部は自主上映会開催や映画宣伝などコロナ禍でも精力的に活動中。8月21日に初製作配給作品『まっぱだか』 が京阪神で先行ロードショー。全国公開を控える。https://www.motoei.com/

【書籍詳細】
「元町映画館ものがたり　人、街と歩んだ10年、そして未来へ」
元町映画館出版プロジェクト　責任編集：江口由美　P304／A6／ソフトカバー　定価：2,700円＋税
製作・発売：神戸新聞出版センター

目次、コメント、トークレポート、販売店など詳細は以下の特設サイトでご覧いただけます。
https://motomachieigakanstory.amebaownd.com/

画像素材は以下よりダウンロードいただけます。
https://drive.google.com/drive/folders/13omgHQjteEM7ir687kf-6NRnJEKxMyBN?usp=sharing

※ご取材をご希望の場合は、元町映画館　酒見info@motoei.comまでご連絡ください。
※ご掲載いただいた場合も、ご一報いただければ幸いです。